


慈悲海岸

曾野綾子



集英社文庫

 集英社文庫

じ ひ かい がん
慈 悲 海 岸

昭和62年 9月25日 第1刷

定価はカバーに表示してあります。

著 者 曾 野 綾 子

発行者 堀 内 末 男

発行所 株式 集 英 社
会社

東京都千代田区一ツ橋2-5-10
〒101

(230) 6100 (編集)

電話 東京 (230) 6171 (販売)

(230) 6080 (製作)

印 刷 図書印刷株式会社

本書の内容の一部または全部を無断複写、複製、転載することを禁じます。

落丁・乱丁の本が万一ございましたら、小社製作課宛にお送りください。
送料小社負担でお取り替えいたします。

© A. Sono 1987

Printed in Japan

ISBN4-08-749252-4 C 0193

集英社文庫

慈 悲 海 岸

曾 野 綾 子



集英社版

目次

或る忠誠……………	五
チエ・ゲバラの春……………	二二
春は馬車に乗って……………	四〇
罨……………	五七
雨の匂い……………	七五
遙かなる歲月……………	九二
おもかげ……………	一一〇
慈悲海岸……………	一二八

盗掘者村のアリ	一四五
モハベの枯山水	一六三
断崖の上の人々	一八二
私の会わなかった人	一九九
葦の穴	二二七
日の下の人の労苦	二三四
あとがき	二五三

解説 高橋敏夫

或^ある忠誠

私は、本来なら、この物語の起きた土地を明記すべきなのかも知れないが、それは後ほど、登場人物の特殊性を説明すれば、少しばかりさしさわりあることを、理解していただけると思う。私は、小説を書くために或る人の生活を暴^{あば}き立てるといふことはできるだけ避けたいという、かなり小心で虚偽的な情熱に今でも細々ととりつかれているからである。ただ土地の名前を明記できないからといって、読者に、全くあてどのない、砂漠^{さばく}のような町のイメージを与える失礼はしたくない。それは東南アジアのどこかの国の、或る首都のこととお考えいただいてさしつかえない。場所をはっきりさせないからといって、私はその土地を、ハリウッドの観光映画のような描き方をしなくてすむ。なぜなら、私はその都市をかなり詳しく知っているし、あたりの風景も色つきではっきりと目に思い浮べられるからである。

それは、その首都に於^おける、新しい町と古い町の接点に当る住宅地であった。古い町では大きな石造りの邸^{やしき}が、一年中、暑さを避けるために、窓の罫^{よらいと}戸を下ろしている。前庭に

椰子の木や、有毒な青蛇あおへびの好む小さな池などを持つ家もある。これらの家は、天井も高ければ、部屋の面積もやたらに大きく、主寝室が四十畳敷の広さを持つものも少なくない。総じて、電燈の設備はどの家もひどくお粗末である。一つには、この国の人が、あまり本を読まないからである。彼らはすばらしい自然な時間の使い手であって、夕暮れにも、夜にもじっと、時の流れの中に、坐すわっていることができる。

いや、電燈の暗い本当の理由は、慢性的に電力が不足しているからでもあるし、別の理由は……これはあまりにも私の独断であろうと思われて公開をはかられるのだが、つまり、この国の人々には、明るいものは、すなわち暑い、という連鎖反応があるので、蛍光けいこう燈とうの光まで嫌きらうようになったのではないかと思うのである。

ところで、こういう古い家は、今言つたような理由で、夜になつても、本は読みにくいし、考えごとをするにも適していない。なぜかと言うと、これら旧式の家は、もともと高い天井に大きな扇風機があるだけで、冷房の設備はないし、あつても、極めて効きが悪い。そこで南方の麻葉のような怠惰な気分が、すっぱりと人々を包みこむ。それは人間が生きながらすすべての活動を停止するというあえかな実感である。日本では、物を考えないでいるということとは、実はそれほどたやすいことではない。しかし、この国では、他国よそもの者の私わたしでさえ、夕暮れの、或あるいは夜の、空気にとけ込んで、有機的な、微細な粒のようになった思いで漂うことができる。

話が横にそれてしまった。これら古い家には通常、浴槽よくそうの設備がない。家々の浴室には大らかな素焼の瓶かが置かれており、その中の水は絶えず少しずつ気化熱を奪われているので、ひんやりと冷えており、外出から帰って来る度に水浴をする人々に、ひそかな自然の恵みを与えている。第一、水瓶は——値段にしても安いものなのだが、長い間、日光に当たっていないというだけでも、この国では貴重な存在に思える。

これら古い家のあちこちの壁や天井には、守宮やもりがはりついている。彼らは大変、穏やかな動物で、夜、電燈の光を目当てに飛んで来る小さな虫を、目にもとまらぬ早さで、舌の先でからめとつてくれ、あとは時々か細かい声でちゅちゅと啼なくだけなのだが、爬虫類はちゆうるいを嫌う人々には、やはりあまり評判がよくない。

そこで——必ずしも守宮のせいだけではないのだが——この町に住みつく外人のために、新しい住宅地ができてしまったのである。

新しい家々の外見は、国籍不明である。特徴は、家の開口部が、ずっと大きいということだ。それはこの国の風土には合わないのだが、そんなことには構っていられない。じつとりと練り上げられ、濃縮されたような太陽の熱が、まともに大きなガラス戸を撃つが、これらの家々は、その代り強力な冷房装置を持っている。守宮が家の中に侵入できにくい理由も、つまりは、窓が閉められているからなのである。新しい家は、色も明るく、軽薄ですらある。壁が青磁でテラスの部分がピンクに塗ってあったりする。蛇のひそむ池もな

ければ、裏庭のバナナの木さえない家もある。庭は芝生である。

八木道助夫妻が住んでいるのも、そのような新しい外人用住宅の一軒であった。ただしこの家の勝手口にはバナナが生えている。古い、この国らしい家に住みたくはあるけれど、結局は生活の便利さに惹かれて、こういうつまらない家に住んでいるの、と言う八木夫人・桂子は、今年三十五歳だが、私の三十年来の知己でもあった。つまり私は、彼女を幼稚園の頃から知っているのである。

八木夫人はどちらかという、男っぽい性格であった。学校では秀才とは言えなかったが、この国へ来るや否や言葉の勉強を始めて、「他の人たちと比べると、決して語学の才能があるとは思えないのに」どうかこの国の小学校三年生くらいの教科書がわかるようになった。それで最近はおもむくばら、近所の土地の子と遊んでいるので、日本人学校へ行っている二人の娘たちは、おもしろがって笑っている……。

私は八木家でもう一人懐かしい顔に出会った。八木家に長くいるお手伝いさんで、田所登美という。八木一家が外国へ転任することになった時、「登美ちゃんも一緒に来てくれるそうです」という報告を受けはしたが、こうして会ってみると、彼女の健闘をたたえてもいいような気分になった。

彼女が八木家に来たのは、もう十年も前になるという。小さかった娘たちは、母親より登美になつき、八木氏は八木氏で、いつ迄もいてくれるのはありがたいけれど、女には婚

期があるから、と、彼女のために、度々縁談を持ちこんだりもした。しかし、そのどれもが気に入らなくて、登美はこの家の一員になってしまった。転勤が決った時、八木夫人はもう一度、登美を同行するかどうか思索した。経済的な面からだけ考えれば、出先で人やとうほうが安い。しかし、登美のほうでやめると言わない限り、別れるにはしのびなかつた。心配は、彼女がいよいよ結婚の相手にめぐり会うチャンスがなくなることと、馴れない気候や食べ物にどれだけ適応できるかということであった。しかし田所登美は行きたくない、と言いい、子供たち二人は、嬉しさのあまり、登美の両側からとびついた。

「登美ちゃんは、語学の天才なのよ」

八木夫人は私に言った。

「驚いたのよ。私も負けん気でやったけど、登美ちゃんのほうが、今じゃ、私より安く、値切って買って来るんですもの」

それは八木夫人がいかに金がありげな服装をしていて、田所登美がいわゆるお手伝い然としているからだと考えると大まちがいであった。八木夫人は髪は男のように短く刈り、お化粧もマニキュアもしたことがない。家ではジーパンに男物のセーターという姿だったので、八木家ではしばしば奥さんのほうが、お手伝いさんと思われたのである。私は八木夫人が、外国暮らしをすれば少しは変わるかと思つたが——とくに南方の生活はストッキングや手袋をつける習慣がないから、マニキュアとペディキュアは日本よりももっと一般化し

ているので、少なくとも、その影響だけは受けたかと思っていたが——彼女は相変わらず、自然のままであった。

このような、女性には珍しい強さを、私は高く評価していたが、或る意味では愛らしさに欠けると考えるべきなのかも知れない。その点、登美のほうは女性的であった。髪はいつも長く、肩にかかるほどに伸ばしていた。丸顔で、この南方では貴重な存在と思われるに違いないほど色が白い。もう三十を少し過ぎているだろうに、今でもフリルのついたエプロンが好きで、それがまた、奇妙によく似合う。

おもしろいことに、新しい家であるにも拘らず八木家には例の守宮が全室の壁にべたべたはりついていていた。娘たちがわざと家の中に入れてやって、その観察を理科のレポートにしているのだという。

その夜、八木氏は七時少し過ぎに家に帰るとシャワーをあび、浴衣ゆかたに着替えて、と言いたいところだが、何やら田舎のデパートで買ってきたような風情のジーンズに着替えて、居間の籐椅子とういすにくつろぎ、

「何はともあれ、お客さまのご安着を祝って一杯ビールを飲ませてくれよ」と早くも、私をだしにしている。

「おかげさまで、家族全員きわめてよくこの土地に同化いたしましたね」
八木氏は、少し皮肉な口調で言った。

「何しろ、うちでは東京にいる時から質素な生活をしていたものですから、ここへ来ても町の食堂の飯がうまくて仕方がないし、不潔にも強うございましてね。日本を占領したアメリカの婦人部隊が、戦争直後の日本の水道を信じられなくて、朝、歯を磨くのに、コーラでうがいをしたという噂がありましたけど、ここへ来ている日本人の中には、アメリカ赤痢が恐ろしさに、この暑いのに、熱い飲み物しか口にしないのもおりますがね」

私は、興味を持って訊き返した。

「アメリカ赤痢がありますの？」

「あることは、何でもあるんです。マラリアも、場所によってはありますし、コレラもそう珍しくない。ですけど、うちは、一家をあげて、土地の人の食べる物を食べ、生水をがぶがぶ飲んでますけど、あまり病氣らしい病氣もありません」

外国の土地に馴染むということは、心根の問題ではなく、才能だと私は思うことがある。才能、といっても、頭腦的な才能ではない。ある種の無謀さと、攻撃性と、物見高さに支えられた細胞の生物的な才能なのである。

その夜は、月のいい晩であった。私に与えられた寢室は、娘たちの一部屋をとりあげたものであった。

「狭くてごめんなさいね」

八木桂子は、私に謝った。

「この国でも新しい建物は面積が狭いのよ。古い屋敷だったら床運動ができるくらい大きな寝室のうちもあるんですけど」

私は窓を開けて外の空気を一杯に入れた。今は乾季で蚊はほとんどいないのだった。私のすぐ目の前には、黒々とした隣家の庭の森が、月の光に洗い流されるように広がっていた。人口数百万の都会なのだし、自動車もかなり多いのに、よくよく耳を澄まさねば、押しつぶされたような都会の騒音も、ここ迄は聞えて来なかった。

私は、隣はどういう家なのか桂子に尋ねた。すると彼女は、それが、あるヨーロッパの小さな国の大使の公邸なのだ、と説明した。

「その大使とおっしゃる方はねえ。もう六十を過ぎた方だけど、実に気さくで温和な方なの。十何年前に、奥さまを亡くされて、それ以来ずっとお一人なんだけど、読書家で、美術がお好きで、日本に行った時に買って来たっていう見事な土佐絵の屏風びょうぶなんかも持っていていらっしゃるの。私たちは、何もあちらの大使館とは関係ないんだけど、うちの娘たちは、時々お庭に遊びに入れていただいたりしているのよ。子供さんがもう大きくなってしまったもんで、小さな子供が珍しくて、可愛かわいくてたまらないらしいのね。上の娘が帰って来て『ママ、お隣のうちには土佐絵があるよ』なんて言っているの。土佐絵なんて知りもしないくせに大使に教えていただいたらいいのね。だけど実はね、ただ単にお隣さんだけの関係じゃなくて、私は、心を痛めていることがあるの。うちの登美ちゃんが、大使が連

れてきていらっしやっている召使いみたいな人と恋仲になったのよ」

桂子は声をひそめて言った。

八木夫人は、大使公邸にいる背の低い小さな外人に時々気がついていないではなかった。彼は庭の一隅いちぐうにある花壇の世話をしたり、大使が可愛がつているボルゾイを庭で運動させたりしていた。もつとも、桂子もその男が、どういう立場の人間であるかは、憶測がつかなかった。日本ではほとんど使われない言葉として、執事しつじとか、下男げなんとか、給仕頭きゅうじがしらとかいうものがありそうだったが、彼は、そのどれかに当るのだろうか、と考えていた。男は年の頃は四十近いと思われたが、それも八木夫人には確信が持てなかった。彼は国籍や国民性を越えて、静かなタイプだと思われた。彼はいつも一人で黙々と働いていた。声をあげるのは、ボルゾイを呼ぶ時ぐらいだった。

桂子はいまだに登美とこの男とが、どうして親しくなり、意志を伝えあえるようになったのかわからないのである。

「だって、あちらさんにはこの国の人も働いているから、その人たちを使うために大使が本国からお連れになった召使いも、多少はこの国の言葉を話すかも知れないわ。でも登美ちゃんのほうは、片言の英語だって喋しゃべれやしないのよ。それなのにどうして、お互いの身の上がわかったのか不思議でしょうがないの」

登美はマーケットへ買出しに行った時に、その男と会ったのかもしれない。あるいは彼

が、例のボルゾイを道に放した時、それに怯えた登美に、だいじょうぶだという仕種を見せたのかもしれない。登美は初め、彼が自分とおつつかつくらしいの小男であることに、あまり、いい感じを持ってはいなかったようである。男は目と目が鼻のほうに寄っていたし、鼻はアル中のように赤くて髪はあま色の縮れ毛だった。ただし彼はすばらしい深いよく響く声をしていて。そのよく響く声で彼は自分の境遇を登美に語ったのである。

彼はポーランド人であった。登美が何度きき直しても、はつきりと発音が聞きとれないような難かしい名前の田舎町に生れた。ちよつと町を出はずれると、道端に小さな屋根のついた厨子があり、その中に立っている聖母マリアの像に村の男たちは必ず帽子にちよつと手をかけて挨拶をして通り過ぎるような町だった。家々の背後にはどこからも山が見え、人々は、テラスや軒先にゼラニウムや蘭の鉢を飾っていた。

細かい経緯は、八木桂子も知らない。恐らく登美にもわかっていないのではないかと思う。とにかく彼の一家はイタリアに移民した。イタリアのどこへ移民したかもよくわからない。たぶんローマであろう。何年か前に彼の母が、ひどい病氣をした。教会の神父がいろいろ心配してくれたが、母ははかばかしくよくならず、衰弱で死にそうになった。彼は母をフランスのルルドに連れて行って、奇蹟の泉と言われる水の力で治してやりたいと考えたのだった。

ルルドというのは、フランスのスペイン国境に近い地方にあり、一八五八年、ベルナデ

ツタ・スビルーという粉屋の娘に聖母マリアが現われた後、そこに泉が涌いたのであった。この泉の水に浸かると治らないはずの病気が突然治癒するといふので、それ以来、ルルドの地には重病人の参詣が後をたたないのである。

その一例に、フランソワ・パスカルの奇蹟的治癒の話がある。フランソワは一九三八年当時、四歳であつたが、ある日突然嘔吐し発熱した。二、三日の間、発熱は続き、ついで光を眩しがるようになった。医学的に見て脳膜炎の症状がはつきりしていた。発病から三か月後には視力障害と四肢の麻痺が起つた。子供は、全くだらんとして、明りの存在も判別できないくらいになつた。さらに二か月が経過してからフランソワはルルドに連れて来られ、ルルドの泉に浸けられた。ルルドには、これら病人のために幾つかに仕切られた特別の浴室があるが、鉱泉は決して沸かされることはない。どんな瀕死の病人も、真冬であろうと、冷たい水の中に浸けられるのである。

フランソワは、水にひたされた時、引きつけるような反応を示した。二日後に彼は再び、水に浸けられた。それから浴室の前の広場に戻ると、子供は見えない目と、動かないはずの手で、自分の乗って来た三輪車のほうを指さすようにした。すでに帰りの汽車の中でフランソワは沿線の灯が見えるようになっていた。家に帰ると、フランソワは、あたりの物を眺め、おぼつかない足取りで部屋の中を歩いた。それから後の回復は徐々にではあつたが確實であつた。